

ふくりゅう

特定非営利活動法人 日本下水文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成20年1月25日 通巻54号

下 水 文 化 研 究 発 表 会 が 開 催されました

平成 19年 11月 17日、日本水道会館において第9回下 水文化研究発表会が開催され、約50名が参加しました。 当日は、木下哲評議員の開会挨拶ののち、セッションI、

II に別れての研究発表およびパネルディスカッションを 行いました。セッション座長、パネルディスカッション・ コーディネーターより報告いたします。

セッションI

座長:地田修一(本会副代表)

セッションIは「下水文化史」、「下水文化活動」、「下 水文化研究」の広範囲な分野からの発表となりました。 I-1 江戸の下水奉行について」(栗田彰氏)は、下水奉 行の廃止については江戸の町触に記録が残っているが、でI-5大規模地震に備えた仮設トイレの整備に関する考察 はそれが設置されたのはいつなのかという疑問から端を 発した精緻な論考です。下水奉行は、町奉行所の中に置か れ町奉行を補佐して下水の見廻りをする役職で、その配下 に下水奉行衆と呼ばれる同心たちがいたと推論していま

I-2 近江八幡の近世都市水利(神吉和夫氏)は、天正年 間(16世紀後半)に城下町として建設された近江八幡の旧 市街に造られた、背割り下水ならびに井戸を水源とし竹管 を用いて生活用水を給水した古式水道、それぞれの起源と 維持管理について考察したものです。これらの施設の一部 は改修、改築を経て現存しており、地域の文化遺産として 永く記憶に留めておきたいものです。

I-3 農民哀史にみる屎尿曳きの実態(地田修一)は、主 要部分が日記体で述べられている「農民哀史」(渋谷定輔 著)をテキストにし、大正末における最寄りの駅までの屎 尿の購入・運搬の実態を紹介するとともに、この当時の屎 尿の肥料としての位置付けを明らかにしようとするもの I-7 水制度改革と下水道(稲場紀久雄氏)は、これから です。渋谷の詩「沈黙の憤怒」の中の、「こんなかぎりな い嘲罵と冷笑を浴びながら、内部にさか巻く熱い血汐と魂 の憤怒とをじっとこらえて、夜十時過ぎに停車場へ糞尿ひ きにいく」の一節が心に深く残りました。

Ⅰ-4 寄生虫予防法と、その汚物掃除法および清掃法との 関係(稲村光郎氏)は、大正~昭和初期における寄生虫予

防をめぐる衛生行政の取組みを述べるとともに、屎尿の 安全な肥料化への施策展開をあらためて跡付けたもので す。屎尿を肥料として利用することの影の部分を克服す べく改善してきた行政側の努力を忘れてはならないで しょう。

(野村誉久氏)は、緊急時に必要となる仮設トイレ数の新 たな算定法を検討するとともに、マンホールトイレの効果 を評価したものです。避難者や帰宅困難者の集中する度合 いから必要トイレ数を算定する方法は、不足箇所及び不足 数とその対応策の効果を評価するうえで有用な方法であ り、また、マンホールトイレの整備は非常に効果的である が、接続先下水管の地震対策も併せて行うことが不可欠で あるとしています。

I-6 市民ボランティアネットワーク「石津川に鮎を」の 発足と活動(木村淳弘氏)は、下水道ができたら川はきれ いになると言ってきた下水道人の立場で、環境関係の様々 な市民活動に参加してきた当研究会関西支部の活動の一 端を紹介したものです。「川の環境改善は行政だけではで きません。市民一人ひとりが川を大事にするという心がけ がなければ川はきれいになりません。」という、発表者の 言葉には活動者としての重みがありました。

の 50 年先を見据えると、下水道という特定の部門だけで なく水資源や水環境をも含めた、水制度全般にわたっての 根本的な改革が必要であることを説いたものです。「水制 度改革推進市民フォーラム」の活動を通して確認された現 状認識を基に、水管理基本法(仮称)の制定、水管理庁(仮 称)の創設など7項目の提言を行なっています。

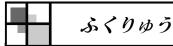
セッションⅡ

座長:高橋邦夫(本会運営委員)

伊藤章夫氏(立命館大学)「発展途上国におけるODA 水供給プロジェクトの受益者定性的評価」、中村作二郎 氏(伊藤忠林業)「養豚農場の自家用廃水浄化施設」 坂本麻衣子氏(東北大学)「バングラデシュにおける住 民の自発的な水環境改善に関する一考察-特に飲料水に 着目して-」、Tofayel Ahmed氏(JADE Bangladesh 益評価などを論じたものです。 Office) Water and Sanitation in Bangladesh: A Close View from Socio-cultural Aspect」、高橋邦夫(日 本下水文化研究会)「バングラデシュ農村地域における エコサン・トイレの導入効果と衛生改善便益」の5編の 研究発表がありました。

これら論文は、安全な飲料水の供給と排泄物の管理に 焦点をおいたものであり、地域における衛生改善方策と 評価、ひいては水環境改善方策と評価につながるもので す。ことに、ODA水供給プロジェクトやバングラデシュ に関する論文は、東南アジア・南アジアの発展途上国に おける衛生問題を扱ったものであり、住民の意識調査を もとに、問題の枠組み、受益者の評価、施策の効果と便

こうした国々で研究目的にかなったデータを取得し蓄 積することは容易ではありません。多くの場合、仮説検 証型のスタイルをとる場合が多いと思われますが、さま ざまな背景を持つ地域や、そこに居住する住民の活動を どのように認識するかという問題の枠組みと調査方法に



常に留意する必要があると思います。また、取得した 文化研究会が取り組んできたエコサン・トイレの普及を データを不用意に加工することなく、十分な配慮が必要 主としたバングラデシュ農村地域における衛生改善活動 となることはいうまでもありません。

途上国の衛生問題に対する本研究発表会での成果のひ いでしょうか。 とつとして、安全な飲料水の供給と排泄物の衛生的な管 と方法論の再構築をあげることができます。従来、下水 ご迷惑をおかけしたことをお詫びします。

に対し、本研究発表会での最大の示唆と言えるのではな

なお、劉軍・加藤善盛氏(日水コン)「中国水汚染の 理は、水の流れや住民の衛生環境意識を介して一貫した 実態と政策課題-日本人は何をすべきかー」は著者の都 ものであるとの認識をもとにした、問題の枠組みの再考 合により発表キャンセルとなりました。参加者の皆様に

パネルディスカッション コーディネーター:酒井 彰(本会代表)

パネルディスカッションは、本会・海外技術協力分科会 が地球環境基金の助成により実施した衛生改善事業が平 成 18年度で終了し、新たに平成 19年 10月から2つのプ ロジェクトがスタートしたことを受け、「生活改善技術と 地域社会の受容」というテーマで行いました。技術の選択 にあたって何を考えなければいけないか、適用した技術が 地域の人や社会に受け入れられるためにはどういうプロ セスが必要か、地域の生活環境を改善するためにはさらに 何が必要かということを議論しました。参加したパネリス トの方々は、村瀬誠氏(雨水市民の会)、山村尊房氏(厚 生労働省)、益田信一氏(JICA 地球環境部)、Tofayel Ahmed 氏 (JADE, Bangladesh Office) です。

村瀬氏は、雨水タンク導入の経験からモノを作るだけで なく、これを社会の仕組みのなかに組込んでいく必要性を 指摘され、住民のモーティベーションを高める必要性から トレーニングの場にもなる「雨水村」建設の構想などが披 露されました。山村氏からは、膨大な資源が投入されても、 すぐに使われなくなってしまうような無駄をなくすため には、計画から管理までを一貫して対応できる人材育成や 組織の養成の必要性が指摘されました。

益田氏は、個別の技術やモノを導入してもなかなか生活 改善につながらない事例を紹介するとともに、JICA では 草の根レベルの衛生改善の事業化に向けての調査を大学 や NGO とともに進めていることが報告されました。 Ahmed 氏からは、バングラデシュでは住民のモーティ ベーションを高める役割を担うべき役人がその責務を果

たしておらず、住民教育や啓発はもっぱら NGO に依存さ れている現状が語られました。途上国では、そうした NGO がビジネスになっており、パートナーを組むにあたって は、現実を踏まえた注意が必要なことが村瀬氏から指摘さ れました。

パネリストが共通して指摘されたことは、技術やモノだ けでは地域社会の生活環境改善にはつながらないことで す。本会の海外協力活動では、トイレづくりから生活環境 全体を視野に入れていくつもりですが、そのためには、地 域社会それぞれで、生活習慣や生活の現実そのものをよく 知らなければならないと感じました。また、山村氏から指 摘されたことですが、日本の縦割り行政は、衛生改善に貢 献しにくいところがありますが、本会のような NGO にも その活動成果を広く開示・伝播していくことが求められる と考えています。



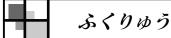
パネルディスカッションの様子

下水文化をみる会報告

「小平市ふれあい下水道館、玉川上水を訪ねて」

第9回下水文化研究発表会の開催に併せて、平成19年 11月18日(日)に以下の三箇所を訪れる「下水文化を見 る会」を実施しました。

- 小平市ふれあい下水道館:玉川上水の近くにあり、平 成7年10月開館。地下5階にあるふれあい体験室から 地下28mに埋設されている実物の下水道管(内径 4.5m) に入ることができます。地下4階の特別展示 室(近代下水道前史)の展示物ならびにその解説の多 くは、当研究会が全面的に協力したものです。
- 玉川上水:江戸時代初期・1654年に完成した玉川上水 は、昭和40年(1965)に淀橋浄水場が廃止されるま
- で、江戸・東京への飲料水供給の用水路として300年 余の長きにわたって機能してきました。その後も、多 摩川の羽村取水堰から小平監視所までは、廃止された 淀橋浄水場の代替として建設された東村山浄水場への 導水路として引き続き使用されていましたが、それよ り下流は空堀となっていました。しかし、清流復活を 要望する都民の声を受け、昭和61年から多摩川上流水 再生センターの高度処理水が送水され、玉川上水の中 流域は蘇りました。
- 江戸東京たてもの園: 玉川上水沿いの都立小金井公園 の一画にある、都内各地に現存していた各種建物を移



築・修復して展示している野外博物館です。この日は、 特別展「玉川上水と分水」が開催されていました。

午前 10 時 JR 国分寺駅集合ということで、関西支部から た。 講 座 室 で の2名の方を含めた総勢17名の老若男女が絶好の小春日は、顕微鏡に接 和のもと参加。案内は、地元の松田旭正氏(元小平市下水 続 した 映像 モ 道部、当研究会監事) にお願いしました。

実は今回、多摩地区の施設見学を企画したのは、多摩地 下水を処理し 区を拠点としている多摩信用金庫が地域文化振興の一環 ている微生物 として発刊している『多摩のあゆみ』に「多摩の下水道」を拡大して見 が特集され(第126号、平成19年5月)、当研究会の5 せていただき 人が執筆者として依頼されたことがきっかけとなってい ましたが、意外 ます。ちなみに、執筆者とタイトルは次のとおりです。

- ・栗田彰「下水とは何か?ー近世絵図にみる下水のかたち」 皆見とれてい
- ・栁下重雄「江戸から明治初期 八王子宿の下水の行方」ました。
- ・北川知正「多摩川流域における水の利用、排水処理」
- ・地田修一「下水道がなかった頃のトイレ事情」
- ・松田旭正「小平市ふれあい下水道館」

部・坂巻和男氏の「多摩地域の下水道整備のあゆみ」です。という話、上水沿いの桜並木の話 などなど。

この冊子は1万数千部ほど印刷され、希望者に無料で配 布しているとのこと。この度の執筆が縁で、当研究会の名 示されており、先ほど歩いてきたコースを振り返るととも 前が多摩地区の人たちにいささかでも記憶していただけ に、玉川上水の全体像を俯瞰することができました。園内 ればありがたいことです。

下水が流れている下水道管の中に入るのは初体験。異口同 ありがとうございました。 音に「もっと臭いと思っていたが、さほどではなかった。」

との感想をも らしていまし ニターにより、 と可愛い姿に



玉川上水 (新緑の写真ですが)

昼食後、いよいよ玉川上水に沿って江戸東京たてもの園 へと向かいました。松田さんからの説明を受けながらの1 時間半ほどの散策。玉川上水の本流からの分水の話、その なお、本特集の主論文は、東京都下水道局流域下水道本 分水を利用しての水車の話、短期間でしたが舟運があった

たてもの園での特別展では、玉川上水の大きな模型が展 の展示建物は 20 数棟もあるので自由見学ということに 小平ふれあい下水道館では、参加者の多くの方が実際の し、ここまでで幹事団はお役ご免に。案内役の松田さん、

(運営委員 地田修一 記)

下水文化研究発表会に参加して

北九州高等工業専門学校 上小澤 初馬

私は昨年の5月ごろから、発展途上国における衛生問 設備(トイレ)にアクセスできるような世界を実現し、 るべきかについて議論され、パネリストの方々の経験を 人々の生活環境を改善したいと思うようになりました。

そこで自分には何ができるだろうかと、インターネッ らば現地でのプロジェクトに関わっている方に、今の時 段なかなか接することのない分野の方々が集まって、 聴きしようと思ったのが、今回の研究発表会の参加動機 いの研究の交流によって何らかの建設的な提案がなされ です。

研究発表会については、日本下水文化研究会ホーム 文募集の段階からの工夫が必要だと思います。 ページに掲載されていた案内で知りました。しかし九州 ことに決めました。

にするという試みがよかったのだと思います。

後半のパネルディスカッションでは、主にNPO・NGO 題に興味を持ち始め、将来、全ての人々が基礎的な衛生 による開発援助の在り方や、どのような形態で実施され 踏まえた教訓などを聴くことができました。

しかし、課題もあるかと思います。パネルディスカッ トや図書館で勉強していたのですが、17歳の今、大学で ションは、あらかじめテーマが設定されていたとはい 何かを専門的に勉強しているわけでもなく、何を知れば え、前半の各種研究発表のテーマに関連する話題がもっ よいかがわからなくなることがしばしばありました。なと取りあげられてもよかったのではないでしょうか。普 期私は「何を勉強すればよいか」といったことを直接お 各々の研究成果を発表し交流する機会なのですから、互 てもいいはずです。それを実現するためには、広報・論

また今回は若者の参加が少なく、全体として内輪のた に住んでいる私にとっては、気軽に参加できるものでは めの催しだったように感じます。次代を担う若者へのア なかったので、九州近辺で途上国における衛生問題への プローチをもっと積極的に行うことは、途上国の衛生問 取り組みに関する催しがないか調べたのですが、見つか 題に取り組む人材を生み出すきっかけづくりをするため らなかったので今回の研究発表会に参加させていただく にとても重要です。他の分野で国際協力活動を行ってい る国内のNGOは、若い世代向けのイベントを開催するな 研究発表会では、トイレに限らず下水や衛生に関する ど、積極的なアプローチを行っていて、そのイベントを 幅広い分野における研究について知ることができ、視野 きっかけにその分野での活動を志すようになった若者は が広がる良い機会となりました。分野ごとの分科会とせ 少なからずいます。衛生問題に関する活動を行っている ず、参加者が多種多様な発表に触れることのできるよう 国内の団体も、連携をとりながら若者にアプローチして いくべきではないでしょうか。

学ぶことの多いすばらしい国 日本

トファエル・アーメド

Japan, an Amazing and Exemplary Country

Tofayel Ahmed (JADE, Bangladesh)

11月10日5時半成田空港に到着、霧雨が滑走路を濡ら置かれ、人々は自分でごみを捨てている。日本人の公共空 していた。長い間待ち望んだ日本の地に最初の一歩を踏み 間に対する責任感はバングラデシュ人よりずっと高い。 出すことができた。入国審査を終え、出迎えに来てくれて いたとき、雨は激しくなっていた。JICAのゲストハウス が安心して飲めるということも驚きだ。 までタクシーを使ったが、近距離と私の荷物の大きさから 日本では、目の不自由な人、老人、障害のある人、子供 日本滞在中、さまざまな「日本食」を経験した。それらは、うだ。 蒟蒻(英語では a devil's tongue という)、かき、さば、 味でおいしい。

次の日、日本下水文化研究会の事務所において、研究発 驚いた。日本人は自然を大切にしていると思った。 表会で発表する論文について指導を受けた後、横浜にある で、横に並んで立った私に酒井代表は、後ろに立つように い経験だ。 言った。理由は急ぐ人にスペースを空けなさいということ かしい思いをした。

12日は新幹線で京都に向かった。車窓から見える、山、 森、海の美しさにうっとりしていた。ことに富士山は、飛 行機からも見ることができたが、ほんとうに魅了させられ た。京都では、ともに住民からのヒヤリング調査を行って いる京都大学大学院の柴田翔さんと清水寺を訪れた。

色とりどりの紅葉に彩られた木造の舞台が私の心をと らえた。そして頭が良くなると言われて「音羽の滝」の 水を飲んだ。その夜はさらに神戸へ向かい、酒井代表や 柴田さんそして明日神戸を案内していただける兵庫県 庁の植松京子さん達とインド・レストランで食事をし

翌朝、ホテルへ迎えに来てくれた植松さんに神戸を 案内していただいた。まず、市役所展望台からポートア イランド、神戸港、六甲山、ロープウェイなどを鳥瞰し、 神戸市水の科学館を訪れた。神戸水道が保存している さまざまな資産を見ることができた。夕方から、流通科 学大学へ向かい酒井教授のゼミでバングラデシュの 人々の生活について写真を紹介しながら講演を行っ た。

東京でも京都でも神戸でも、道路にごみが落ちてい ないことも驚きだ。分別用のごみ箱がいたるところに

バングラデシュとの違いをもっとあげてみよう。横浜の いた高橋さんと挨拶を交わし、京成線で東京へ向かった。ホテルでのこと、私は、ペットボトルの水があるはずと 紙幣も硬貨も使える自動販売機、自動で管理されている駅 思っていた。ホテルの人に水は自分で買わなきゃいけない の改札に、日本の技術水準の高さを知った。市ケ谷駅に着 のか聞いてみると、tap water が飲めると言う。水道の水

なかなか乗せてもらえない。ゲストハウスのチェックイン を背負った女性、妊婦など社会的弱者の権利が保障されて を済ませ、近くの居酒屋に向かう。高橋さんは、「郷に入っ いると思った。目の不自由な人専用のルートが道路にも駅 ては郷に従え」と言って、すべて日本料理を注文する。私 にもある。交差点では、音で信号の変化を知らせている。 は、宗教上口にできないものだけは注文しないようにお願 電車には優先席がある。交通の発達にも目を見張る。私は いするだけだった。そこで、生まれてはじめて「刺身」と東京でいかなる交通トラブルにも遭遇しなかった。東京中 ゆでた蛸を「飲み込」んだ。それは、ひとつの冒険だった。の地下に地下鉄のネットワークが張り巡らされているよ

雨水市民の会の村瀬さんに「雨水資料館」を案内してい 麺類である。さばは、私たちの国の hilsa という魚に似た ただいた際、岸辺を歩いた隅田川にも、その水がきれい だったこと、鳥の多いこと、鳥が人を恐れていないことに

私の来日の目的である下水文化研究発表会での発表が 酒井代表の自宅に招かれた。その途中、車が通っていない 17日に終わり、その翌日は、かつて修士論文のテーマにバ にもかかわらず、道路を渡らずに待っている人々を見て奇 ングラデシュを選び、私が現地でお手伝いした福島陽介さ 異に思った。 信号が変るのを待っていること知り、規則に ん (現・国土交通省) に東京タワーと後楽園遊園地を案内 したがって行動する日本人に驚いた。私の国では、絶対にしてもらった。後楽園で乗ったローラーコースター、80度 そんな行動はとらない。しばらくして、駅のエスカレータ の傾斜を急降下したことは、今でも恐ろしく、忘れられな

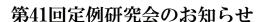
日本に滞在した10日あまりで、私は、教育、モラル、 だった。日本人のお互いを思う行動を知るとともに気恥ず 法律遵守、秩序、適切な指導力が国の向上にとって重要な 要件になることを学んだ気がする。

(翻訳:酒井)

※トファエルさんは日本滞在中、ここに書かれていない多くの 方ともお会いし、お世話になりました。本人になりかわりまし て、御礼申し上げます。



清水寺にて



第41回定例研究会を下記のとおり開催いたします。 事件を経ながらも、活動地と組織をある程度拡大してく 講師の白幡氏が所属する「シャプラニール=市民による ることができました。こうした経験の中で考えたことを 海外協力の会」は、我々が活動を始めたバングラデシュ 中心に、海外協力活動に必要な視点や工夫すべきことな とネパールで、貧しい人々の生活上の問題解決に向けた どをご紹介したいと思います。 活動を現地と日本国内で実施している NPO 法人です。 かねてより、今後、本会の海外活動を進めていくうえで、場所: TOTO 新宿ショールーム・会議室 シャプラニールから学ぶことは少なくないと考えてお り、今回講演をお願いいたしました。

講師:白幡 利雄氏(シャプラニール=市民による海外 電話: 03-3345-1010 【場所は次ページ参照】

協力の会・海外活動グループチーフ)

演題:市民による海外協力の実践から得られたこと

~シャプラニールの経験から~

シュで海外協力活動を始めてから35年。日本の団体との育成支援を通じた生活向上のほか、手工芸品の販売活 して何ができるのかを追求する中で、これまで数多くの 失敗や小さな成功を繰り返してきました。駐在員が現地 約 70%は日本国内の多くの賛同者によって支えられて の村人に襲撃されて瀕死の重傷を負うといった大きな おり、学ぶべき点は少なくないと考えています。

日時: 3月25日(火)18時30分~20時30分

新宿区西新宿 1-6-1 (新宿エルタワー 26 階)

交通: JR 新宿駅(西口)より徒歩5分

《シャプラニールの簡単なご紹介》

シャプラニールの基本方針は、さまざまな社会的要因 から貧困に苦しむ人々の「生活向上の意欲」を支えるこ 内容:シャプラニールが、独立後間もないバングラデ とにあり、主な活動は、相互扶助グループ「ショミティ」 動、自然災害時の緊急救援活動があります。活動資金の

「町触にみる江戸の小便所」 (栗田彰氏) 第48回屎尿·下水研究会例会報告

平成 19 年 12 月 7 日(金)、東京・飯田橋の東京ボラン ティア・市民活動センターにおいて、第 48 回の屎尿・下水 ⑦ これに対する町方からの返答書は、「前々から小便溜が 研究会例会が行なわれました。講話者は、本会評議員の栗 田彰氏にお願いしました。栗田氏は、一年前の平成18年 12月に本会・下水文化叢書の第9号として、『江戸下水の 町触集』を刊行されていますが、今回の講話は、せっかく 『江戸町触集』(塙書房刊)から拾い出しながら、ページ 数の関係で割愛せざるを得なかった「小便所」に関する話 です。講話の骨子はつぎのとおりです。

- ① 『江戸町触集成・全二十巻』に載っている「小便所」に ⑧ 1801 年 11 月 4 日の町触には、小便所の雛形の絵図が ついての記述は、全部で11件である。
- ② 朝鮮通信使が来る(1748年9月)にあたって、小便所 を中橋広小路と浅草広小路に六箇所置くことに決めて いるので、その外の町々では拵える必要はない(1748 年3月9日)。
- ③ 15年後にも二つ出ているが、いずれも同じく朝鮮通信 使がらみのものである。こちらでは、小便所の設置場所 や数については変わりがないが、小便所を軽く囲い、手 水場を付けて、汚れていない手拭を置いて、町人が世話 ⑩ 1842年10月10日の町触を読むと、堀端の河岸地にも をするようにと触れている。
- ④ どうもこれらの小便所は、朝鮮通信使が江戸に来たと きに臨時に設けられたもののように思われる。その後 ての町触はない。
- ⑤ 1764年2月6日の町触に、「小便無用(立ち小便禁止)」 などの札は外しておくようにとあり、この頃にはまだ 江戸の町には小便所が作られていなかった。
- ⑥ 「江戸市中の道筋や裏店の路地、辻々、土手下などへ、 小便溜の桶を埋めて置いて、田畑の肥やしにしたい」と の願いが出たので、町奉行所が町方に「差し障りの有

- 無」を問い合わせている。(1784年3月 25 日)。
- 埋め置かれていて、掃除の者が汲み取っている」町が、 小網町3丁目など23ヶ町と深川の町々のうちに160ヶ 所ある と云っている(1784年4月3日)。このこと から、江戸でも小便が肥料として使われるようになっ てきたことがわかる。ただ、江戸市中で小便所のある所 はまだ少なくて、道端の「下水」(下水路)に小便を垂 れ流しにするのが普通だった。
- 載っている。箱形の小便壷を作り、そこから地中に埋め 込んだ筒で小便を油樽へ流し、小便をそこへ溜める と云うものである。さらに、小便樽には松の厚板で作っ た蓋がされている。
- ⑨ 小便所を積極的に作らせようとした、こんな町触も出 ている。「小便を流し捨てることがないよう、小便を溜 める樽の埋め場所を、家主とよく相談をして決めるよ うに。」(1803年9月22日)
- 小便所や雪隠が作られており、また町中の雪隠や小便 所は、町人だけでなく、幕府の役人たちも利用していた ことがわかる。
- も、朝鮮通信使は江戸に度々来ているが、小便所につい ⑩ 1861年6月26日の町触からは、幕末頃には江戸の町々 のあちこちに小便所が作られ、ここから汲取られた小 便は肥料に使われ、また小便を肥料として売ることが かなりの稼ぎとなったことが推察される。
 - ② 江戸の町で小便所が作られるようになったのは江戸時 代中期の後半からであり、一般的に使われるように なったのは江戸時代後期になってからである。

(運営委員・地田修一 記)

バングラデシュ便り(30/Nov./2007)

サイクロンSidrがもたらした災害 本会運営員 高橋 邦夫

ダッカには、11月20日深夜に着いた。翌朝、ホテルの は、竹や木杭、木材、トタンなどの安普請にもかかわら ましい報告もある。もし避難情報を受信した場合、当然 れた模様である。そして、新聞に目を通さないわけには 犯罪である。 いかない。広告欄を除く紙面の1/3はサイクロン災害の 真が多くを占めている。風速150mph、潮位20ftの記事 及している井戸の恩恵を受けていない。塩水が混じり、

民、家屋、収穫間近の田畑、養魚池、家畜や野生動物を う。こうした状況は必然的に、疫病の蔓延を招来するこ 襲い、それらを壊滅させ、さらに海に浚い、かろうじて とは論を待たない。 難を逃れた人々は、天空で仮寝し、飲み水不足や飢餓に 晒され、疫病の蔓延に救済を求めていること。政府や 無であった。サイクロンSidr災害は、天災か、人災か。 も追いつかない事実、ひいては、地球温暖化に言及して ろう多額のドナーや援助物資はどこに消えたのか。 失われた家畜頭数は242,000、収穫間じかの被災田面積 けがこんな目にあうのだろうといった論調はまだしも、 損失が報じられている。物価格差を考えれば損害総額は 名大学教授の論評は、笑止千万というべきであろう。 数千億と考えてよいだろう。

するものがある。ことに近年の記録に残る災害は、1970 (下の図はその一部)に基づくものである。 年、1991年の災害である。それぞれ、約40万人、13万8

千人の犠牲者を出した。無論 のこと、政府や住民は必ずし も無策でいたわけではなく、 外国からのドナーを元に、 200-800人を収容できるサイ クロン・シェルターをベンガ ル沿岸部に約5,000箇所を設 置したというが、Sidr災害に は到底、耐え切れるものでは なかった。シェルターまでた どり着いたものの、満員のた め門は閉ざされ追い返され犠 牲となったという痛ましい報 告も多い。さらに、設置され た約5,000箇所のサイクロ ン・シェルターの半分は、無 管理、土砂流出、地盤沈下な どの理由で使用不能な状態で 放置されていたことは特筆し ておくべきだろう。

また、数百を数えるという行方不明の漁業従事者は、 窓越しに見えるボナニ湖周辺に隙間無く張り付くスラム 船主からラジオの携帯が許されていなかったといういた ず、見た目には被災の影響は無い。24時間を越える停電 のことながら彼らは漁労を中断し陸へ戻るだろう。それ と強風に見舞われたというダッカは、幸いにも被災を免 が船主の利益を損なうというのである。これはまさしく

被災後の生命維持の必要条件は、安全な飲み水と食料 記事で埋められている。ベンガル湾沿岸部の被災地の写 の確保である。被災地である南西沿岸部は、全国的に普 がまず目に付いた。風速150mphは風速67m/sであり、 飲料水に適さないからである。多くの住民は、カナルな また国土の約半分が標高20ft以下であることに思いが到 どの表流水を水源として暮らしており、かろうじて補給 される救援物資である食料は、人間や家畜の死体の浮か Sidr (シドル) と命名されたサイクロンは、農民、漁 ぶ表流水を用いて調理せざるを得ない状況にあるとい

そして、人々が自ら災害に対処するといった記事は皆 NGOが進めてきたサイクロン・シェルターの絶対数不 わずか16年前に、14万人に近い犠牲者を出した記憶と学 足、内外国からのドナーと救援活動や、必死の救援活動 習はどうなっているのであろうか。当時寄せられたであ いるものが多い。災害に見舞われた南西沿岸部は23県に 日々、被災者や犠牲者の生々しい写真の掲載されるなか 及び、被災者の総数は1,500万人、被災世帯は887,000、 で、3ヶ月前の洪水災害に加え、なぜバングラデシュだ は23,000エーカー、総額2000千万taka(約350億円)のことさら地球温暖化のみを取り上げた現実離れした某有

バングラデシュのサイクロンの被災規模には驚嘆に値 注)以上の情報は、The Daily Star (11/21-24)の記事



「第5回中川金治翁を偲ぶ会」に初参加して

NJS 藍原 和弘

族4人で初めて参加させていただいた。多摩川の源流と 地に建てられており、富士山も遠望することができた。 なる水源林の造成に尽力した中川金治氏を偲ぶととも 山道復路では、五歳の息子が頼もしく先頭に立って歩く に、水の大切さを再認識するというイベントであった。

本会の参加者は総勢31名(我が子二人を含む)であ スでの移動であった。『行き:奥多摩周遊道路経由、月 を過ごし、家族全員で来年も参加したいと思った。 夜見第一駐車場に立ち寄り奥多摩湖とその周辺を展望、 昼過ぎ丹波山村着、「のめこい湯」温泉につかる。帰 していただいた。我が子が稲場夫人から約束を取り付けて り:15時丹波山村出発、奥多摩湖にある「水と緑のふれ いたそうだ。おかげさまで、子供たちにせがまれて秋の夜 あい館」に立ち寄り水に関する見識を深める。』

一日目の夜は、記念会として18時から馳走を囲んで、 村民との談話交流会が催された。地元の逸話を紙芝居に お 世 話 に した作品が稲場教授の自演にて行われ、日出子夫人も教 なった方々 授に続かれた。二人の子供たちは一番前に座り、稲場夫 へこの場を 妻の紙芝居にとても興味深げに聴き入っていたことが印 借 り て、お 象的であった。日頃は、ぜんそく気味の妻も顔色良く、 礼申 し上げ 温かく愉しいひと時を過ごさせていただいた。

翌朝は、9時よりサヲラ峠にある中川神社を目指して もありがと 登山した。狭阻な登山道ではあったが、正午には丹波山 うございま 村民が中川翁を祭った中川神社に全員辿り着くことがでした。 きた。洗い米と御神酒を奉納して、皆であらためて水の

日本下水文化研究会主催の中川金治翁を偲ぶ会に、家 ありがたさに手を合わせた。中川神社は丹波山村の景勝 一場面も見られた。

この催しは5周年を迎えるそうで、稲場教授の紙芝居が り、ほとんどのメンバーは藤森氏の運転するマイクロバ 記念として冊子に編纂された。大勢の方々と心通う2日間

> 後日、日出子夫人から子供達宛に絵本を2冊プレゼント 長に3度も絵本を読み聞かせる思い出ができた。

その他、 ます。どう



一日目 夕食の宴

旧事九官録 巻4

物質三熊の事 続

本会運営委員 森田英樹

恐る恐る手にした『屎・尿・屁』箱入り布表紙のなか なか立派な装丁である。奥付には昭和3年、定価2円と ある。パラパラ頁をめくるが、数式や化学式らしきもの はない。残念ながら物質三態を解き明かす「科学の書」 ではなさそうだ。トイレ本を探す身としては嬉しいや ら、悲しいやら。とりあえず購入し書店を後にした。

時は流れ、私の手元に『屎・尿・屁』の著者、高野六 郎の文献が集まるようになった。昭和3年の『屎・尿・ 屁』。昭和16年の『便所の進化』。昭和18年の『医者の 黒焼』。昭和19年の『眼座の鰯』などである。これらを 並べて見ると面白いことに気づく。昭和3年の『屎・ 尿・屁』は箱入り表紙のなかなか立派な装丁である、と 記したが、昭和3年、16年、18年、19年とその紙質、造 本が明らかに低下している事が見てとれる。時局厳しき 折り当然の事であるが、同じ著者の本で比較するのも面 白いものである.しかし逆に、そんな御時世に良く戦意向 上とはあまり関係のない、この種の本の出版が許可にな り紙の供給が得られたものだと感心もする。『医者の黒 焼』『銀座の鰯』ともに5000部を刷っている。

『銀座の鰯』には、「街をあるいても、八百屋と魚屋は 空っぽだが、呉服屋と本屋には相当品があることに気が つく。中略 兎も角本は沢山あるものらしい」とある が、高度経済成長期生まれの私としては、戦中は物不足 のイメージが強く、実感が沸かない。

ところで、著者、高野六郎に関しては『ごみの文化・ 屎尿の文化』において地田修一氏が「高野六郎の言論活

動と実践一改良便所」と題する文章を書かれており、そ ちらをご覧いただければと思うが、簡単に紹介しておこ う。1884年茨城県に生まれ1960年没、享年76。東京帝大 卒、医学博士、細菌学を専攻、伝染病研究所、北里研究 所を経て慶応大学教授。内務省防疫課長、厚生省衛生局 長を経て日本医療団理事を務めた経歴である。内務省時 代に有名な「内務省式改良便所」の研究開発、普及に尽 力した人物である。戦前のトイレ史を語る上で欠くこと のできない人物と言えよう。

さて、私に衝撃を与え、中学校時代の物質三態の実験 を思い出させたタイトル『屎・尿・屁』であるが、本文 にこのような記述がある。「屎は米の飯の残骸であり、 尿は体内の排水を意味するであろうし、屁はその字義不 明瞭であるが、恐らく肉体的臭気を示して居るものであ ろう。屎は大体固形体である。尿は原則として透明な流 動体である。屁は瓦斯体であることは明であるが、色沢 清濁等は確かめられていない。兎に角人体の廃物に物界 の3相を示顕して居るのも何かの啓示かもしれない」高 野六郎は物質三態を意識して著書のタイトルとしてい た。トイレ史の偉人高野六郎と森田少年は同じ視点で あった事が妙に鼻高々ではあるが、後にトイレ研究を行 うことなど考えもしていなかった森田少年が物質三態の 実験で「うんこ」「おしっこ」「おなら」の事で頭が一 杯になったのは『何かの啓示』いや、虫の知らせであっ たのかもしれない。

第50回 屎尿・下水研究会例会のご案内

講師:稲場紀久雄 氏(大阪経済大学教授、本会評議員)

演題:「旧下水道法制定の経緯」

内容:明治33年に制定された旧下水道法の基本的な考え方ならびに

同時に制定された汚物掃除法との兼ね合いについて考察する。

日時: 3月27日(木) 18時30分~

場所: TOTO新宿ショールーム (スーパースペース)・会議室

新宿区西新宿1-6-1 (新宿エルタワー 26階)

交通: JR 新宿駅(西口)より 徒歩5分

電話:03-3345-1010

で行われ以下のことを決定した。

運営委員会・事務局より

- 講演集の購入案内:第9回下水文化研究発表会の講演集を1部1,000円(送料別で販売しております。電子メールあるいは FAXにてお申込みください。なお、講演内容は1ページからの座長報告をご参照ください。多くの論文は一読に値すると思います。
- 今年度会費納入に際して、本会活動費に対する寄付を募らせていただきましたが、116名の会員から合計 260,000円の貴重な寄付をいただきました。下記に記載させていただき、謝意を表したいと思います。
- 次号のふくりゅう発行は3月初旬とし、機関誌と併せてお送りしたいと思います。

● 2009年度スコットランド・エジンバラで第2回バルトン記念 行事を行うべく関係者との協議を進める。
● 09年度以降の事業実施のため、08年度バルトン墓前祭終了 後募金活動を開始するとともに、助成金を得るための準備を 行う。現有の基金は、08年度事業に充てるとともに、残額は 2009年度事業に投入する。

第2回バルトン記念基金管理委員会報告 第2回バルトン記念基金管理委員会は平成19年12月15日東京

● 2008年度の墓前祭は5月10日(土)に行い、墓前祭においてバ

ルトン賞の表彰を行う。同日午後に受賞者による受賞記念講

演を含む講演会を行う。(受賞者は追ってお知らせします)

【寄付をいただいた方:五十音順】秋葉誠、朝倉恒夫、麻田幹彦、綱川清、石井明男、石川旭、石田智、伊藤東洋雄、伊藤陽二、稲場紀久雄、稲場日出子、岩崎晃、植松重男、上山堅義、内田信一郎、宇土澤光賢、大澤佳子、大西尚、大庭克世、大歯亮一、梶ヶ谷勝、嘉藤俊博、桂川雅信、鎌田修、河井竹彦、河原長美、河村清史、神吉和夫、菅家啓一、甘長淮、杵島亮治、北川知正、北山憲、木下哲、木村淳弘、栗田彰、栗林栄、小嶋公史、児玉琢郎、小寺武夫、小林三樹、小林りょう、小松建司、齋藤博康、酒井彰、櫻井克信、笹尾圭哉子、笹部薫、佐藤八雷、佐野廣一、嶋田隆雄、島田晴人、重岡慎哉、清水洽、鋤柄修、杉戸大作、鈴木直子、関野勉、政比呂志、竹島正、高島昭俊、武島繁雄、高橋栄吉、高橋邦夫、高橋正宏、高橋洋一、高柳枝直、田中亮、谷口尚弘、玉井義弘、地田修一、辻本充子、照井仁、那須俊哉、中川右近、中越哲男、中西正弘、中野年弘、中本至、中村正雄、中村幸雄、楢原孝枝、西堀清六、西村伸一、長谷川清、長谷川健司、八田宏、東重雄、平田純一、平野栄一、福智真和、福田欣宏、藤岡祐子、藤木修、藤田俊彦、藤本忠利、藤森正法、保坂公人、堀江信之、前川浩、前田正博、枡本匡央、松下眞、松田旭正、松永喜芳、松永端静、氷上克一、水落元之、宮川和則、三輪慎治、森下典昭、森島治雄、森田英樹、安彦四郎、栁下重雄、山口征宏、山中章、山野寿男、山村尊房

どうもありがとうございました。

編集後記 ▶研究発表会に参加された上小澤さんから厳しい注文をいただきました。私たちの活動があまり知られていない、外部からの参加が少ないというのは、若い人に限らないことのようにも思います。バングラデシュでの活動をもっと多くの人に知ってもらえるように、愛知博での展示やスタディツアーを企画してきました。愛知博での反響は小さくなかったと思いますが、スタディツアーの参加者は限られています。しかし、たとえ参加者が少なくてもこうした企画は継続していくことが大切だと思います。▶パネルディスカッションでも成果を伝播することの大切さを指摘されました。もっと広報や雑誌への投稿に力を入れることも大切だと思います。これは研究成果についても同様ではないかと思います。科研費の研究成果を高校生に知らせる企画にも助成されるようになっています。▶ともかく、井の蛙にならぬようにしていきたいもので

す。とくに、海外協力活動では、自己満足は禁物だと思います。現地の人々の生活環境の改善を通じて、生活そのものがよくなってはじめて、援助者、被援助者双方の満足が得られるのではないかと思います。その満足を得るために多くの人の協力が必要です。 賛同者、協力者を増やすためのノウハウを増やし、実行していきたいものです。 (酒井 彰)

特定非営利活動法人 日本下水文化研究会 〒162-0067 新宿区富久町6-5 NJS富久ビル別館3F

TEL & FAX 03-5363-1129 e-mail: jade@jca.apc.org

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご覧ください

http://www.jca.apc.org/jade/index.htm 関西支部 http://www1.kcn.ne.jp/~k-atsuhi/

 ふくりゆう 通巻54号目次

 第9回下水文化研究発表会 座長報告
 1

 第9回下水文化研究発表会 パネルディスカッション
 2

 下水文化を見る会報告 ふれあい下水道館、玉川上水
 2

下水文化研究発表会に参加して 学ぶことの多いすばらしい国 日本

3

4

5

5

第41回定例研究会案内 屎尿·下水研究会例会報告

屎尿・下水研究会例会報告 町触れに見る江戸の小便所

Bangladesh便り サイクロンがもたらした災害